

長篇小説
出船の唄 (25)
川上 茂

里子の父は唯政治的野心にのみ惹かれて、大造に見事操縦されてしまった譯であつて、眞父として娘の将来の夫を定める上に於て、何等の考慮をもたぬ程ではなく、新妻の彼女を眼に入れても痛くない程に可愛がつて呉れた。——矢張り、大造さんと結婚して良かった。妾は坂田家へ、しばしの淋びしさ位と思ふと、彼女は今度は、心が起つて來た。——それにして、あの照雄さんは、今頃どうして居らつしやうる事でらう？きつと、南米で、妾より以上の女を得て、妾の事なんか考へて居ては呉れないに違ひない——。——と思ふよ、なぜか、嫉妬に似たるものが彼女の頭の一角を掠めて飛んだ。忘れませう、あなたが良い方ですもの……」いへえ、妾、ほんとに幸福かい？」夫にせがり付き乍ら、お前が、大造に肩を抱かれる毎にまつたあとで、沁々と、現在自分の幸福な境遇を喜ぶのであつた。

「ほんとに……人間の運命って妙なものねえ」と、一人ごとの様に云つてしまつた。——「ほんとに、月に轟雲、花に風の譬諭の如く里子にも悲しい一つの事件が起つた。それは、夫、大造の高校入學であつた。

「まあ、困つたお父さんだこ

とつぶやいて、死人の様に酔惚むべき父は、私達二人の運命ひどてゐる父の重い體を不器の鍵を握つてゐたのだ。そして妻は、飽くなき肉身の父の政治的野心の犠牲となつて命にも代わらぬ死を脱がせた。金盞に水を汲んでから枕をつまみ上げる。自分に何か入つてゐるらしい譯なのだ。今朝、照雄さんは、眼に入れても痛くない程に可愛がつて呉れた。——矢張り、大造さんと結婚して良かった。妾は坂田家へ、しばしの淋びしさ位と思ふと、彼女は今度は、心が起つて來た。——それにして、あの照雄さんは、今頃どうして居らつしやうる事でらう？きつと、南米で、妾より以上の女を得て、妾の事なんか考へて居ては呉れないに違ひない——。——と思ふよ、なぜか、嫉妬に似たるものが彼女の頭の一角を掠めて飛んだ。忘れませう、あなたが良い方ですもの……」いへえ、妾、ほんとに幸福かい？」夫にせがり付き乍ら、お前が、大造に肩を抱かれる毎にまつたあとで、沁々と、現在自分の幸福な境遇を喜ぶのであつた。

「ほんとに……人間の運命って妙なものねえ」と、一人ごとの様に云つてしまつた。——「ほんとに、月に轟雲、花に風の譬諭の如く里子にも悲しい一つの事件が起つた。それは、夫、大造の高校入學であつた。

「まあ、困つたお父さんだこ

とつぶやいて、死人の様に酔惚むべき父は、私達二人の運命ひどてゐる父の重い體を不器の鍵を握つてゐたのだ。そして妻は、飽くなき肉身の父の政治的野心の犠牲となつて命にも代わらぬ死を脱がせた。金盞に水を汲んでから枕をつまみ上げる。自分に何か入つてゐるらしい譯なのだ。今朝、照雄さんは、眼に入れても痛くない程に可愛がつて呉れた。——矢張り、大造さんと結婚して良かった。妾は坂田家へ、しばしの淋びしさ位と思ふと、彼女は今度は、心が起つて來た。——それにして、あの照雄さんは、今頃どうして居らつしやうる事でらう？きつと、南米で、妾より以上の女を得て、妾の事なんか考へて居ては呉れないに違ひない——。——と思ふよ、なぜか、嫉妬に似たるものが彼女の頭の一角を掠めて飛んだ。忘れませう、あなたが良い方ですもの……」いへえ、妾、ほんとに幸福かい？」夫にせがり付き乍ら、お前が、大造に肩を抱かれる毎にまつたあとで、沁々と、現在自分の幸福な境遇を喜ぶのであつた。

「ほんとに……人間の運命って妙なものねえ」と、一人ごとの様に云つてしまつた。——「ほんとに、月に轟雲、花に風の譬諭の如く里子にも悲しい一つの事件が起つた。それは、夫、大造の高校入學であつた。

「まあ、困つたお父さんだこ

申譯してよいのか、この妻は！
用に支へ乍ら、汚れた袂を洗ふ。妻は、飽くなき肉身の父の政治的野心の犠牲となつて命にも代わらぬ死を脱がせた。金盞に水を汲んでから枕をつまみ上げる。自分に何か入つてゐるらしい譯なのだ。今朝、照雄さんは、眼に入れても痛くない程に可愛がつて呉れた。——矢張り、大造さんと結婚して良かった。妾は坂田家へ、しばしの淋びしさ位と思ふと、彼女は今度は、心が起つて來た。——それにして、あの照雄さんは、今頃どうして居らつしやうる事でらう？きつと、南米で、妾より以上の女を得て、妾の事なんか考へて居ては呉れないに違ひない——。——と思ふよ、なぜか、嫉妬に似たるものが彼女の頭の一角を掠めて飛んだ。忘れませう、あなたが良い方ですもの……」いへえ、妾、ほんとに幸福かい？」夫にせがり付き乍ら、お前が、大造に肩を抱かれる毎にまつたあとで、沁々と、現在自分の幸福な境遇を喜ぶのであつた。

「ほんとに……人間の運命って妙なものねえ」と、一人ごとの様に云つてしまつた。——「ほんとに、月に轟雲、花に風の譬諭の如く里子にも悲しい一つの事件が起つた。それは、夫、大造の高校入學であつた。

「まあ、困つたお父さんだこ

申譯してよいのか、この妻は！
用に支へ乍ら、汚れた袂を洗ふ。妻は、飽くなき肉身の父の政治的野心の犠牲となつて命にも代わらぬ死を脱がせた。金盞に水を汲んでから枕をつまみ上げる。自分に何か入つてゐるらしい譯なのだ。今朝、照雄さんは、眼に入れても痛くない程に可愛がつて呉れた。——矢張り、大造さんと結婚して良かった。妾は坂田家へ、しばしの淋びしさ位と思ふと、彼女は今度は、心が起つて來た。——それにして、あの照雄さんは、今頃どうして居らつしやうる事でらう？きつと、南米で、妾より以上の女を得て、妾の事なんか考へて居ては呉れないに違ひない——。——と思ふよ、なぜか、嫉妬に似たるものが彼女の頭の一角を掠めて飛んだ。忘れませう、あなたが良い方ですもの……」いへえ、妾、ほんとに幸福かい？」夫にせがり付き乍ら、お前が、大造に肩を抱かれる毎にまつたあとで、沁々と、現在自分の幸福な境遇を喜ぶのであつた。

「ほんとに……人間の運命って妙なものねえ」と、一人ごとの様に云つてしまつた。——「ほんとに、月に轟雲、花に風の譬諭の如く里子にも悲しい一つの事件が起つた。それは、夫、大造の高校入學であつた。

「まあ、困つたお父さんだこ

申譯してよいのか、この妻は！
用に支へ乍ら、汚れた袂を洗ふ。妻は、飽くなき肉身の父の政治的野心の犠牲となつて命にも代わらぬ死を脱がせた。金盞に水を汲んでから枕をつまみ上げる。自分に何か入つてゐるらしい譯なのだ。今朝、照雄さんは、眼に入れても痛くない程に可愛がつて呉れた。——矢張り、大造さんと結婚して良かった。妾は坂田家へ、しばしの淋びしさ位と思ふと、彼女は今度は、心が起つて來た。——それにして、あの照雄さんは、今頃どうして居らつしやうる事でらう？きつと、南米で、妾より以上の女を得て、妾の事なんか考へて居ては呉れないに違ひない——。——と思ふよ、なぜか、嫉妬に似たるものが彼女の頭の一角を掠めて飛んだ。忘れませう、あなたが良い方ですもの……」いへえ、妾、ほんとに幸福かい？」夫にせがり付き乍ら、お前が、大造に肩を抱かれる毎にまつたあとで、沁々と、現在自分の幸福な境遇を喜ぶのであつた。

「ほんとに……人間の運命って妙なものねえ」と、一人ごとの様に云つてしまつた。——「ほんとに、月に轟雲、花に風の譬諭の如く里子にも悲しい一つの事件が起つた。それは、夫、大造の高校入學であつた。

「まあ、困つたお父さんだこ

